

《報告》

オルドス地域におけるキリスト教の現在

オトク前旗のカトリック教会を中心に*

芝山 豊

清泉女学院大学

本日はお招きにあずかり、ありがとうございます。桜美林大学で日本モンゴル学会を開催するにあたり、宗教の多様性を扱うシンポジウムを開き、是非、キリスト教に関する報告も入れたいと、旧知のバイカルさんから相談を受け、お役にたてることがあればと、浅学菲才の身を顧みず参上した次第です。プロテスタンティズムを建学の精神とする桜美林大学で、バイカルさんが、ネストリウス派東方教会、私がカトリック教会のお話を致しますのは、大仰に申しあげれば、エキュメニカルな意味があることもかもしれません。

お目にかけるスライドを印刷したハンドアウトを用意いたしておりませんことご容赦下さい。宗教問題を扱います場合、注意を払ってもなお、予想し得ないご迷惑を関係者におかけする場合もあるからです。本日の発表内容には特段の問題はないと存じますが、一部デリケートな要素もございますので、スライドの撮影や発言の録音につきましても慎重なご配慮を賜りますようお願い申し上げます。

さて、与えられましたテーマは、バイカルさんの過去の報告を受

*本報告は2010年5月15日に桜美林大学で行われた日本モンゴル学会春季大会におけるシンポジウム「モンゴルの宗教の多様性～過去と現在そして未来」での報告要旨である。文中にあるように当該地域の政治状況に配慮して、口頭の報告と要旨は完全に一致してはいない。

けて、オールドス地域のキリスト教の「いま」です。本題に入る前に、モンゴル国におけるキリスト教事情を概観しておきましょう。

モンゴル国の宗教人口は無宗教とするものが40%で、仏教が50%、キリスト教系宗教に属する人口は全体の約4%で、その90%がプロテスタント、9%が末日聖徒イエス・キリスト教会（モルモン）、残り1%がカトリックとギリシャ正教だと言われております。登録されたキリスト教団体は160ほどですが、250ほどの未登録の福音派教会があるとされています。（2009 Report on International Religious Freedom Mongolia）「民主化」直後から20世紀後半にかけては、ドイツやノルウェーなどヨーロッパのミッションが特徴的な布教活動を展開していましたが、21世紀に入り、アメリカや韓国の福音派の教会がより大きな役割を果たしているように見えます。私がモンゴル語訳聖書の歴史の研究を始めた1980年頃とは隔世の感があり、様々な宗教書のモンゴル語訳も出回り、トマス・ア・ケンピスの『キリストにならいて』のモンゴル語訳まで出版されております。

こうした趨勢の中であって、モンゴル国におけるカトリック教会の活動はかなり地味なものと言えるでしょう。モンゴル国政府がキリスト教系ミッション・スクールの設置に消極的な態度をとり続けたこともあり、学校づくりには困難が多かったのですが、ストリートチルドレンの支援をはじめ、社会活動は定着し、貧しい子どもたちも含めカトリックの中等教育機関で職業訓練を受けることもできるようになっており、ミサに集まる人々も次第に多くなっています。しかし、「民主化」直後に活動を開始したにも関わらず、受洗者数は2009年1月現在で僅かに530名程度を数えるにすぎません。召命面でも司祭志願者をようやく得た程度で、2009年時点ではまだ一人のモンゴル人司祭もいない状態です。日本を含め、現代の東アジアのカトリック教会は、受洗者数を多くすることに主眼を置かない姿勢をもっているわけですが、オールドスのカトリックとはきわだった違いを示しています。

宝貴貞『近現代蒙古族宗教信仰的演変化』（中央民族大学出版社、

北京、2008) に示された 2004 年統計によれば、オルドス市の宗教人口約 9 万人 (全人口の 6.5%) のうち、天主教徒、すなわちカトリック信徒数は 7 7 6 3 人で、そのうち、モンゴル族は約 3 0 0 0 人。そのほとんどが、オトク前旗の周辺に集中しているということです。オトク前旗の人口は約 7 万人、モンゴル族約 2 万人と言われていいますので、この数字を信じれば、オトク前旗のモンゴル族の実に 6 人に 1 人がカトリック信徒だということになります。オトク前旗のモンゴル人カトリック信徒数は、モンゴル国全土のカトリック信徒数をはるかに凌駕しているのです。信徒の数が多いだけではありません。モンゴル人の聖職者を有しています。モンゴル国でも典礼はすべてモンゴル語になっていますが、前述のように、モンゴル人の司祭や司教はいません。

南モンゴルでは、外国人宣教師が国外に追放された 1950 年代以降、とりわけ、文革期には、カトリック信徒は外の世界から隔離されてしまいます。典礼に関する書物もほとんどとりあげられ、モンゴル人司祭のもとにはカテキズム 1 冊が残されたのみであったと言います。しかし、モンゴル人司祭の記憶とわずかな資料、そして漢語文典を参考に、モンゴル人自身の手によって共同体としての教会は再建されていきました。外の世界と隔離された禁教時代を耐え抜いたカトリック教会は隠れキリシタンの如きものだと思われそうですが、決して、そうではありません。ミサの写真でお気づきのように、第 2 バチカン公会議以降の現代教会の姿です。

オトク前旗のカトリック教会は所謂公認教会ではありませんが、愛国系公認カトリック教会と無関係でもありません。ただ、その関係は漢人社会における地下教会と公認教会の関係とは微妙に異なる要素をもつものだと言えるでしょう。中国共産党対バチカン、あるいは公認教会対地下教会という 2 項対立の他に、中国人の教会対モンゴル人の教会という弁別が可能であるということです。ボロ・バルガスン (城川) の草原にたたずむ教会聖堂は舗装された公道からよく見えています、スライドでも分かる通り、公道から教会につ

ながる道路は存在しません。オトク前旗の町の中心部にある（本来ならカテドラルであるはずの）聖堂を集寧の司教座聖堂と比べてみても、その違いは明らかです。客観的にみて、漢族の公認教会と同じ環境を持っていないのです。

2010年4月、バチカン内モンゴルの司教を叙階しました。彼は公認教会からも司教と認められているわけですが、世界で唯一のモンゴル人司教は、中国の公認教会からは司教として数えられていません。

2008年、10月、城川天主堂でその馬司教のために卒寿のお祝い（司教銀祝と司祭叙階六十周年にも当たる）が盛大に開かれました。香港発のニュースによれば、いかにもモンゴルらしいパレード後のミサには、寧夏教区補佐司教ら公認教会の聖職者も加わったということです。当局との難しい折衝の末、めでたく挙行された祝賀祭の陰には、馬司教が苦勞して育てあげた若いモンゴル人司祭の努力があったであろうと想像されます。いずれにせよ、スクート会のベルギー人司祭たちが蒔いた種をもとに、モンゴル語による典礼の形をつくりあげ、モンゴル人の共同体としての教会をたちあげた馬司教の功績を否定し得る力はどこにもなかったということでしょう。

ご存じのように、第2バチカン公会議以前は日本でもミサの主要な部分はラテン語でしたが、いまは通常すべてを日本語で行います。興味深いことは、オトク前旗の町の中心部の教会の主日のミサは、モンゴル語による典礼の形式を、モンゴル語と漢語とのバイリンガルで行うことです。モンゴル語が分からないモンゴル人や漢人のためのものです。ウランバートルでかつて行われていた英語のミサの一部にモンゴル語を挟んだことと比べると両教会の置かれた状況の違いがよく分かります。実際、ウランバートルではモンゴル人用のミサは基本的にモンゴル語のみで行うものへと変化しました。

拙編『南北モンゴルカトリック教会の研究』資料編には、オトク前旗のモンゴル教会で使用されているミサ式次第を収めています。その中の中国式楽譜を民族音楽ご専門の聖心女子大学S r. 岡崎淑

子先生にご覧いただきました。先生のご教示によりますと、ミサ通常文、あわれみの賛歌、栄光の賛歌、使徒信条、感謝の賛歌、平和の賛歌の部分はグレゴリオ聖歌の旋律のようです。また、通常文の歌の間に何曲か、別の賛美歌が歌われており、それらは5音階で中国やアジアの国々の伝統的な歌や器楽曲によく用いられる音階です。ド、レ、ミ、ソ、ラ、ドの5音が主として用いられ、ファとシはほとんどメロディーに出てきません。これらの賛美歌がモンゴル固有の音楽的特徴をもっているかについては、少し調べてみないとわかりませんが、馬司教の妹、シスター・カテリーナの言に従えば、オルドス民謡のメロディーを援用したものかも知れません。

今日のカトリック教会の用語には南北モンゴル間でかなりの差異がみられますが、二つの教会の典礼には、共通するものがあることは間違いなく、それは、まずオルドスで形づくられたものなのです。実際、「民主化」後のウランバートルのカトリック教会は、モンゴル語による典礼を作るにあたり、バルガスンの教会への調査も実施しています。

さて、最後に、北京の建築事務所が設計したオルドスのプロテスタント教会の写真をご覧ください。最近、友人から紹介されたWEBサイトで見たのですが、正直、驚きました。馬司教たちが手作りで再建した城川のタンとのあまりの違いに茫然とします。この教会の詳細にまだ調べは及んでいませんが、最近、フフホトでもウランバートルと同じく、プロテスタント、特に福音派の台頭が著しいようです。布教に対する情熱や欧米文化への憧憬などは別にして、急速な都市化による社会的アノミーの増大といった背景も考えられるでしょうが、そうした分析は他に譲りたいと思います。ここで、指摘しておきたいことは、普遍主義的な立場（場合によっては急進的な原理主義となって現れる可能性もある）のキリスト教の立場と、オルドスのカトリック教会の立場の違いは一考に価するのではないかということです。

それは、人類学の視点から、アラタンボリゴさんも指摘した文化

共生に関わる問題であり、いまひとつは、現代神学の用語でいうインカルチュレーション (inculturation) に関わる問題です。

オルドスの教会は、宗教として、ムスリムやチベット系仏教、儒教、さらにはチンギス信仰に囲まれて共に生きる教会であり、遊牧・牧畜と農業という異なる生活の様式の中に共に生きる教会です。都心で暮らすモンゴル人と違い、遊牧をする牧民にとって主日を守ることさえ困難であること、また、自らの言語においてお祈りを行うことができない教育文化的な環境の中に共に生きることを熟知したキリスト教会なのです。アーメンでさえ、モンゴル語に訳してしまうほどに「土着化」した教会は、他にあまり類をみないものですが、同時に、第2バチカン公会議以降の教会と現代世界との積極的な関わりを、マイノリティーとして暮らすモンゴル人のコミュニティーにおいて「受肉」させるものでもあるのです。これに加えて、モンゴルに関心を抱く人なら一度は目にしたことのある「キリスト教徒と呼ばれることより、モンゴル人と呼ばれることを好む」というネストリウス派サルタクの周辺についてのルブルクの報告を思いだすとき、モンゴルにおけるキリスト教の過去と現在がひとつの流れの中に見えてくるように思われます。

文献抄

- 阿拉坦宝力格「牧民村落里的天主堂」(『人類学与郷土中国』、黒竜江人民出版社、2006年)
宝貴貞『近現代蒙古族宗教信仰的演变化』(中央民族大学出版社、北京、2008年)
南山大学監修『第2バチカン公会議 公文書全集』(中央出版社、1986年)
芝山豊編『南北モンゴルカトリック教会の研究』(清泉女学院教育文化研究所、2008年)
Taveirne, Patrick *Han-Mongol Encounters and Missionary Endeavors: A History of Scheut in Ordos (Hetao), 1874-1911* (Leuven, 2004)
Yang Haiying, "Catholicism in the Ordos Today", *ANTOINE MOSTAERT (1881-1971) C.I.C.M. Missionary and Scholar Volume One Paper*, (Leuven, 1999)
<http://www.ucanews.com/> <http://www.chinacatholic.org/> <http://www.cncatholic.org/>